

中区正木四丁目

尾張元興寺跡 第II次発掘調査

概要報告書

1985

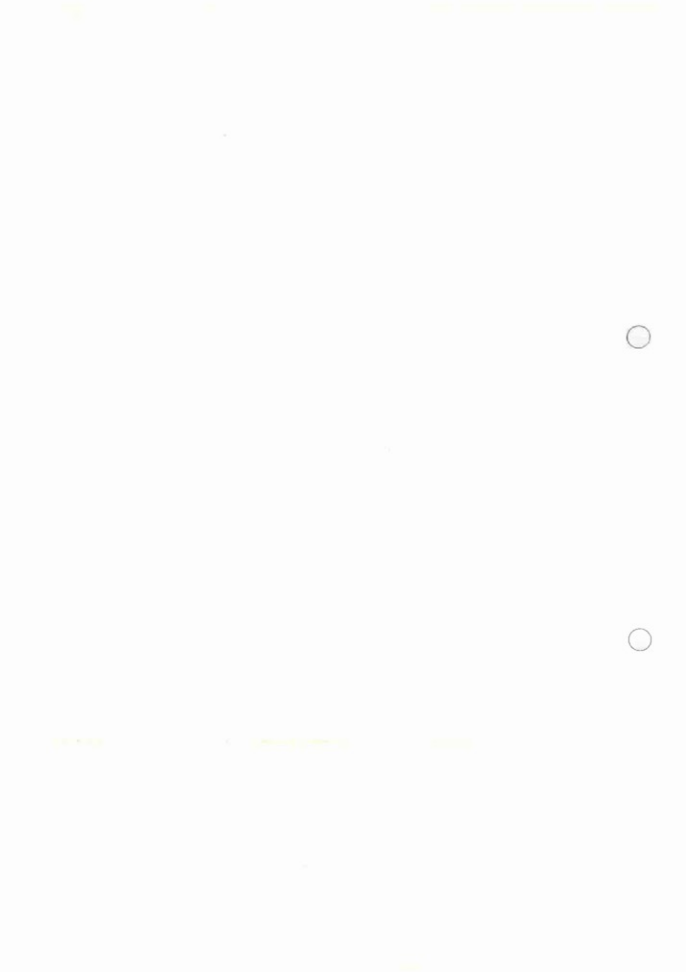
名古屋市教育委員会



カラー図版



単弁蓮華文軒九瓦



例 言

1. 本書は、名古屋市中区正木四丁目1104に所在する尾張元興寺跡の、昭和59年度に行われた、第Ⅱ次発掘調査の概要報告書である。
2. 本調査は、昭和59年7月18日から9月3日まで実施された。調査は名古屋市見晴考古資料館の学芸員が担当した。
3. 調査に際して、施主である一光住宅および一光建設株式会社には、事務所など諸々の便宜をはかっていただいた。記して謝意を表したい。
4. 出土した瓦などの遺物に関して、名古屋大学・奈良国立文化財研究所・名古屋市博物館などから御教示を得た。

目 次

本 文

1. 調査に至る経過……………1
2. 遺跡の地理的・歴史的環境……………1
3. 遺跡の概要……………4
4. 調査の経過……………6
5. 遺構と遺物……………8
6. まとめ……………13

図 版

- 出土遺物実測図及び拓影…………… 14
遺構写真……………15～20

1. 調査に至る経過

今回の調査地である中区正木四丁目1104番地内は、名古屋市内の埋蔵文化財包蔵地のひとつである尾張元興寺跡の範囲内にあり、市教育委員会は土地所有者に対し、本件は宅地取引の際文化財包蔵地であるため発掘調査が必要である旨を説明していた。

昭和58年の暮、不動産業者より市教育委員会に対し、当該地の売買の話があるとの理由から、試掘調査をして欲しいとの依頼があった。翌59年の1月に試掘調査を実施した。その結果、開発に際しては事前に発掘調査が必要であることが判り、土地所有者および不動産業者に報告した。

昭和59年6月18日に、一光住宅およびISO設計から当該地に予定する建築物の概要について説明を受け、文化財保護法第57条第2項による発掘届を提出するように指示した。6月25日には発掘届が提出され、市教委による調査を依頼された。同日、調査経費や期間等についての市教委側からの説明を行った。7月5日には、一光住宅および施工者の一光建設とそれに関わる排土工事の契約についての打ち合わせを行い、7月12日には見晴台考古資料館の調査担当者をまじえて実際の現場業務に必要な事項についても協議した。

7月18日に、契約締結が行われ、発掘調査も同日から開始された。

2. 遺跡の地理的・歴史的環境

現在の名古屋市街の中心部は、標高10～20m程度の平坦な台地上に立地している。台地の北・西・南側は沖積平野や埋立地が広がり、東部にはやや標高のある丘陵がはり出している。台地や丘陵では、都市化による平坦地化が進み、原地形が失われつつある現状である。台地は、いくつかの河川等の開析をうけていて、那古野台地・熱田

台地・御器所台地・瑞穂台地・笠寺台地と呼ばれている。いずれも、洪積世後期に形成された熱田層と呼ばれる層によって形成されている。熱田層はシルト層と砂層の互層からなり、上部はふつう風化による粘土化が進行し明るい黄橙色を呈する。

当遺跡は、熱田層を基層とする台地のうち、熱田台地と呼ばれる台地上に立地する。熱田台地は、郡古野台地の南に連なり、熱田神宮のあたりまで続く、細長い象の鼻状の台地である。台地の西縁に沿って、名古屋城の築城の際に運河として開かれた堀川が流れ、堀川を境に西側には低地帯が広がっている。

台地上には、堀川沿いを中心に、遺跡の分布が多くみられる。当遺跡は行政区分上中区と熱田区の境界付近に位置する。北方の中区側には、正木町貝塚（7-19）、伊勢山中学校遺跡（7-20）などがあり、伊勢山中学校遺跡では近年の調査により古墳時代の竪穴住居などが検出されている。当遺跡のすぐ東隣の国鉄金山駅の南側には、弥生土器や須恵器・山茶碗などを出土する東古渡町遺跡（7-23）がある。

一方、南の熱田区側にも、台地上に20ヶ所以上の遺跡が存在する。とくに高蔵町を中心とした高蔵遺跡（12-2）は、弥生時代前期の遠賀川式土器を出土する遺跡として知られ、弥生から古墳時代にかけての集落遺跡であり、名古屋台地では有数の遺跡である。高蔵遺跡の西側にある断夫山古墳（12-19）は、全長151mを測る東海地方最大の前方後円墳で、古墳時代中期の築造とされる。断夫山は、日本武尊の妃尾張氏の祖とされている宮簀媛命の墓と言伝えられており、実際の被葬者は尾張南部に勢力を伸ばし、尾張国造に任ぜられたとされる尾張氏の首長ではないかと考えられている。また、高座神社の周辺には、6基からなる高蔵古墳群（12-4-9）が存在し、そのうち1号墳は7世紀に築造された横穴式石室を主体部とする古墳であった。

以上のように、元興寺跡の立地する付近は、遺跡の分布密度が高く、歴史的環境のめくまれたところである。その遺跡も一時期だけでなく、いろいろな時代の遺構・遺物を出土するいわゆる複合遺跡が多い。遺跡の存在は古くから知られているものの、その実態はあまりはっきりしない遺跡が多い。近年の発掘調査の成果は断片的ではあるが、名古屋市域の歴史復原への手がかりとしての期待は大きいと思われる。



第1図 周辺遺跡分布図
(「名古屋市遺跡分布図」より)

3. 遺跡の概要

尾張元興寺跡（7-22）は、中区正木四丁目に所在する遺跡である。東西・南北ともに約 200m が遺跡の範囲として想定されている。熱田台地の西縁に立地し、付近は海拔 9 m 前後である。現在も元興寺と呼ばれる寺があり、その前に遺跡案内の木札が立っている。周辺は住宅が立ち並び、昔をしのばせるものはほとんどない。

当遺跡では、古くから瓦の出土が知られており、飛鳥時代末から平安時代にかけてのもの（註1）がみられるとされている。瓦の中には、奈良県の山田寺に使用されたものと同型式の単弁蓮華文軒丸瓦（註2）がみられることから、その創建は7世紀後半期に遡るのではないかと考えられる。名古屋市内では、最古の寺院址と思われ、尾張においても一宮市の長福寺・黒岩庵寺、春日井市の勝川庵寺、海部郡の甚目寺などとともに「最も古い寺院のグループに入れられる。

弘仁13（822）年ごろ成立した『日本靈異記』は、日本最古の仏教説話集であるが、この中に尾張国の強力の子の話が収められている。強力の子は、農夫が雷を助けたそのお礼に授かったものであり、いろいろな活躍の後に奈良の元興寺で出家して道場法師と名乗ったと記されている。伝説として、この道場法師が故郷である尾張国へ帰って元興寺を創建したという。

尾張元興寺がいつ頃からいつ頃まで存続したかについては、出土する瓦などからみて平安時代までは存続していたのではないと思われる。平安時代には、稲沢市内にあった尾張国分寺が焼亡したためその代行を「愛智郡願興寺」がつとめていたという記録があり、この「願興寺」がこの寺にあたるのではないかとされる。

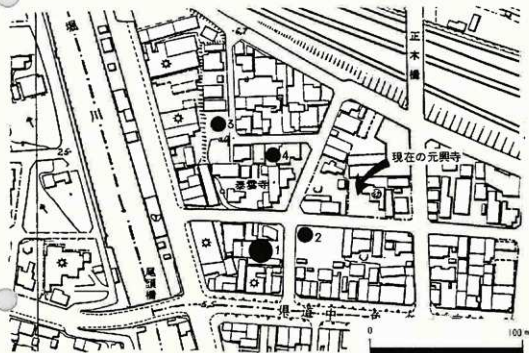
（註1） 石田茂作『飛鳥時代寺院址の研究』（1936）

（註2） 大参義一「尾張出土古瓦の編年的考察」（『名古屋大学文学部研究論集Ⅱ』、史学14、1966）

（註3） 江戸時代末に編まれた『尾張名所図會』でも、「国豊山元興寺」として道場法師開基の話を伝えている。

（註4） 吉田富夫「元興寺あと」（文化財調査第61号『名古屋の遺跡百話』、1973）

昭和55（1980）年に、正木南公園の北西隅付近で、市教育委員会による緊急調査が行われ、花文の叩き目を施した平瓦片などの瓦や須恵器が採集された。近年になって同遺跡の近辺にも都市再開発による小規模な開発が敬見しだし、今年度だけで3件の発掘調査が行われた（第2図参照）。いずれも遺跡範囲の西端近くに位置する。今回の調査を含め、瓦など古代寺院に関連する遺物が出土している。反面、寺院に関する建築物などの遺構は発見されておらず、伽藍の位置・配置および規模などについてはほとんど判っていないのが現状である。



- | | |
|-----------------|-----------------------|
| 1. 今回の発掘調査(II次) | 3. 昭和59年5月の調査(1次) |
| 2. 昭和55年の調査 | 4. 昭和59年7月の調査(南山大に依頼) |

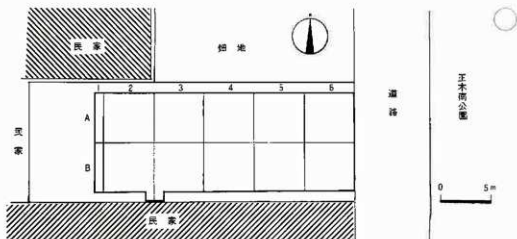
第2図 発掘調査地点位置図

4. 調査の経過

今回の調査は、中区正木四丁目1104番地内に所在する約260m²を対象として行われた。調査区は堀川から約50mほど東に離れた台地縁辺上に立地する。周囲は宅地化がすすみ、調査区の三方は人家または畑地であり、東側は市道を挟んで正木南公園となっている。調査区にはもともと民家が建てられており、調査開始時には上屋がとり払われ平坦地となっていた。南北約10m、東西約26mの細長い調査区である。南北軸を中央で2分し、東西方向は5m間隔を基準として区切り、計12のグリッド(Gr.)を設定した(第3図参照)。

7月18日から20日まで、重機による表土と攪乱層の除去を行った。表土は約30～50cmと浅く、調査区中央付近の3-A Gr.では、重機掘削の際に単弁蓮華文の軒丸瓦(巻頭カラー図版)などの瓦当を含む瓦片が表土直下で検出された。また全体的に遺物包含層も浅く、調査区東半では表土直下から地山の橙色シルトがあらわれる部分も多かった。包含層の上部はすでに削平されていたことも考えられる。

7月23日から人力による本格的な掘削を開始した。まず表土の残土を除去し、攪乱層の検出・掘削を行った。次に、調査区西側から、包含層の掘削と地山面での遺構の検出を併行してすすめた。



第3図 調査区およびグリッド設定図 (1/400)

調査区西半の1-A-2-AGr.付近では、表土下に厚さ5~10cmの茶褐色砂質土が堆積しており、その下に黒褐色の砂シルト質土があらわれる。2-AGr.では、黒褐色砂シルト質土に掘りこまれた、茶褐色砂質土を埋土とする浅いレンズ状の遺構がみられた。調査区中央の3-AGr. 3-BGr.では、重機掘削中にすでに瓦が集中して出土することが判っていた。この瓦が集中する範囲は、茶褐色ないしは黒褐色に近い砂シルト質土が広がり、瓦の集中部を露呈させることと、遺構埋土と考えられる土の範囲を確定する作業を併行してすすめた。調査区東半部では、5-A, 5-BGr.において、南北方向に走る溝(D-1)が検出された。D-1の上部は、約10~20cmの厚さで茶褐色砂質土が堆積しており、その下から溝本来の埋土である黒褐色砂シルト質土があらわれた。

7月25日は、一部の遺構掘削を開始した。黒褐色砂シルト質土中に掘りこまれた遺構をまず掘削し、8月2・3日には平板実測による記録を行った。茶褐色砂質土を埋土とする遺構の大半は、古い瓦片や須恵器片などを含むものの、江戸時代の陶器片が少量ながら含まれるようである。

遺構のうち、3-A・BGr.の瓦集中部はK-1と呼称され、8月5日までに上面を掘削し、瓦片が集中して出土している状態を露呈させた(写真図版2-3)。8月7日には写真撮影を行い、瓦片が集中する範囲を平板によって記録し、翌8月8日から瓦のとりあげと埋土の掘削を開始した。大量の丸瓦・平瓦片に混在して、瓦当や鴟尾の断片が出土するため、写真による記録を行いながら遺物をとりあげた。また、3-AGr.と3-BGr.の境界付近では、瓦片に混じって多口瓶・灰釉皿などの平安時代の陶器類が出土した。多口瓶は、頸部や注口部などが30cm位の範囲の中でほぼ同じレベル面で散らばっていた(写真図版3-1)。瓦片は遺構の上部に集中して堆積している状況であり、下部にいくと出土遺物の量が少なくなった。

2-BGr.の南東端でも、K-1と似た埋土中から、古瓦が集中して出土した。調査区南端の一部を、約1mほど拡張したが、瓦の集中する範囲はさらに南へ広がるようであった。ここからは、単弁蓮華文軒丸瓦(遺物写真3)をはじめ、花文が刻まれた無釉の陶片や、小瓶などが出土している。

遺物について

出土遺物はコンテナ約200箱におよび、その大半は瓦である。主として、3-A・B Gr.のK-1から出土する。

瓦の大部分は通常の丸瓦・平瓦の破片である。軒丸瓦・軒平瓦は10数点が出土し、軒丸瓦は5型式、軒平瓦は2型式に分類される。時期的には、白鳳～奈良時代におさまるものと考えられる。



1

軒丸瓦のうち、1は、6葉の幅広の蓮弁の中にそれぞれ忍冬唐草文を配したものである。4点みつがっている。1の瓦は、内区径19.5cmを測り、中房蓮子の配置は1+6である。中房の周囲には細い刻み目がいれられ特徴的である。外縁は四重圏がめぐる。2、単弁8葉の蓮華文軒丸瓦で、蓮弁の中に子房をもち、山田寺式と呼ばれている瓦である。蓮弁幅2.7cmを測り、中房蓮子の配置は1+5である。小片を含め、3点が確認される。外縁は四重圏がめぐると思われる。巻頭カラー図版の軒丸瓦は、単弁9葉でやや細身の蓮弁をもつ。直径20.5cm、内区径15.3cmを測り、中房蓮子の配置は0+4である。1例のみ出土している。

2



3

3は、単弁8葉の蓮華文軒丸瓦で復原原径約21cm、内区径は15.1cmである。中房には1+6の蓮子を置き、外縁には四重圏をめ

ぐらす。3点がみつまっている。4は、単弁蓮華文軒丸瓦で、8枚の蓮弁をもっと思われ、子葉を線刻で表現している。1例のみ出土する。この瓦は、他の軒丸瓦に比べ厚手であり、一部分粘土が付け足され外縁より外にはみ出すなど、特殊な用途の瓦として作られた可能性がある。5は、複弁の蓮華文軒丸瓦である。

軒平瓦のうち、6は重弧文軒平瓦で、四重弧が型引で施されている。段頸である、7は、均整忍冬唐草文軒平瓦であり、法隆寺で使用された瓦の系列に属するものと考えられる。無頸であり、平瓦部も残る。

鴟尾の断片が1例出土する。鱗の一部と思われ、縦帯の一部が残っている。



4



5



6



7



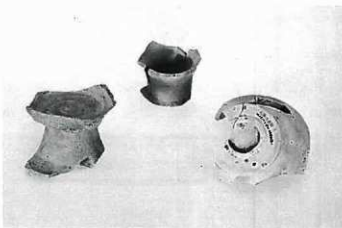
鴟尾断片



多口瓶



花文のある陶片



華瓶



小瓶

瓦以外の遺物のうち、平安時代の陶器類には、多口瓶、皿、華瓶、小瓶、高杯などの器種がみられる。多口瓶は、上半の約3分の1が残存する。3-B Gr.のK-1から瓦片に混じって出土した。色調は淡灰色で、胎土は堅緻である。黒笹14号期のもと思われる。花文が刻まれた陶器片は、2-B Gr.南東の拡張部から出土している。無軸で、白っぽくやや軟質な感じのする胎土である。

これらの陶器類は、時期的には猿投西南麓古窯址群の偏年によれば、黒笹14号（K14）から、黒笹90号（K90）期の間におさまると思われる。

他に目立った遺物としては、古墳時代とくに6～7世紀の頃のものと思われる須恵器・土師器がある。5-A・B Gr.のD-1など黒褐色砂シルト質土を埋土とする遺構や包含層から出土する。須恵器・土師器に共伴して、鉦齒文の線刻のある滑石製紡錘車や、10cm大の大型品を含む土錘などが出土している。

6. ま と め

今回の発掘調査により、大量の古瓦をはじめとする遺物が出土した他、当遺跡に関する新たな知見も少なからず得ることができた。以下で簡単なまとめとする。

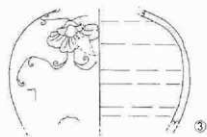
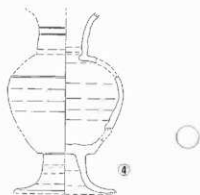
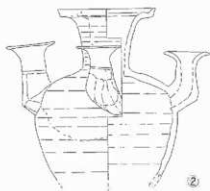
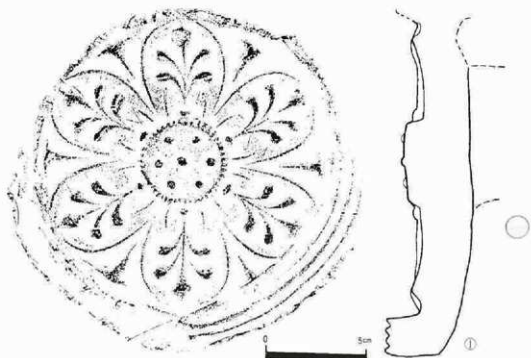
本調査で出土した瓦のうち大半は、3-A・BGr.でK-1とした瓦溜りから出土したものである。瓦は破片が多く、堆積状態からみて、大量に投棄されたものと考えられる。投棄された時期については、瓦と共伴して出土する陶器類からみて、平安時代中期を遡ることはないと思われる。こうした瓦の投棄の意味するところは、今のところ判然としない。

一方、出土した瓦に目を向けてみると、大量の丸瓦・平瓦に混じって、10数点の軒丸瓦・軒平瓦および鴟尾断片が出土している。瓦当文様からみて、おおむね白鳳～奈良時代に年代的にはおさまるものと考えられる。軒丸瓦のうち、山田寺式の単弁蓮華文軒丸瓦は、山田寺から出土する軒丸瓦のひとつと近似する。また、忍冬唐草文蓮華文軒丸瓦や、法隆寺式の均整忍冬唐草文軒平瓦などが出土することは、当時の文化的中心（大和地方）との密接なつながりをもった寺院であったことが考えられる。

寺院建立以前の古墳時代の遺構や遺物の出土も少なくなかった。5月に行われた第1次調査でも、古墳時代の土師器・須恵器が出土し、調査地周辺が同時代の集落跡であったことが考えられた。本調査で、竪穴住居跡や大溝が検出されたことは、当遺跡集落遺跡としての価値も高いことを示したといえる。

尾張元興寺跡は、今回の調査成果からみても、この地域の古代史を考える上でも重要な役割をもつ遺跡のひとつであると思われる。寺院伽藍の位置や規模など、判っていないことが多くあり、今後の課題となろう。なお、出土した遺物は現在、見晴台考古資料館が保管している。

遺物図版



1. 忍冬唐草文蓮華文軒丸瓦 (拓影・左)

2. 多口瓶

3. 花文のある陶器片

4. 壺瓶

(1のみ、縮尺1/2、他は縮尺1/4)

第4図 軒丸瓦拓影および平安時代陶器類実測図

写真図版 1



1. 調査区西半（南から）



2. 調査区東半（南から）

写真図版 2



1. 3-A・B Gr. K-1, 互出土状態 (東から)



2. 3-A・B Gr. K-1, 互出土状態 (南から)

写真図版 3



1. 3-A・B, K-1内
多口瓶出土状況



2. 3-A・B, K-1内
軒丸瓦・軒平瓦出土状況

写真図版 4



1. 5A・B Gr. D-I 北端
(南西から)



2. 5-A・B Gr. D-I
(南から)

写真図版 5



1. 4-A Gr. B-I (南西から)



2. 1-A Gr. K-I 滑石製紡錘車 出土状況

写真図版 6



1. 4-A Gr. K-5 (西から)

2. 4-A Gr. K-5 遺物出土状況





